

第18回 運転ボランティアの気持ち ③

“患者が患者を送る”という活動

2回にわたり「ステップ福岡」の運転ボランティアお二人のお話を中心にお伝えしてきましたが、今回は当事者（透析患者）運転ボランティアとその活動をご紹介します。

さて、「ステップ福岡」では多くの健常者のボランティアが活躍しています。前述のお二人も健常者で、定年退職後に「ステップ福岡」と出会い、通院送迎に携わるようになりました。このように、現在多くの送迎団体で健常者の運転ボランティアが活動していますが、全腎協の通院介護支援事業は当初“患者が患者を送る”当事者間の互助活動として出発しました。近年透析患者の運転ボランティアは全国的に減少傾向にあります。では、そのようななか、同じ透析患者として仲間を送迎する活動を当事者ボランティアはどのようにとらえているのでしょうか。所属する運転ボランティアの8割以上が透析患者という「喜多町地区通院介護支援部会」の馬場亨会長に、この点についてお聞きしました。

「自分ができること」を探して…

馬場さんが「喜多町地区通院介護支援部会」を立ち上げたのは今から7年前のことでした。病院腎友会の会長でもある馬場さんは、日頃から腎友会の会員の皆さんのために「自分ができること」を考えていました。そんな折に“患者が患者を送る”通院送迎のことを知り、「これだ！」と直感したと言います。以来、腎友会ならびに送迎団体の会長として、また一人の運転ボラ

ンティアとして通院送迎に携わってきました。

その送迎活動ですが、特に活動を始めた当初は様々なご苦労があったようです。発足当初の運転ボランティアは馬場さんを含めたたったの数名、全ボランティアがフル稼働状態で送迎にあたる日々がしばらく続きました。また、活動エリアの新潟県長岡市は有数の豪雪地帯で、利用者宅の玄関前の雪かきをしてから送迎活動をすることもありました。聞けば聞くほどご苦労されたご様子ですが、これまでの活動について馬場さんは「いろいろなエピソードはありますが、別に取り立てて苦労といえるような苦労はしてないと思いますよ」と、ことも無げに言います。

送迎は「あたりまえのこと」だから

「私たちは、ごくあたりまえのことをあたりまえにやっただけなんです。同じ方向に帰る患者仲間がいるとします。自然と途中まで一緒に車で帰ろうよ、という話になりますよね。でも、他人を乗せる以上はもしもの時の備えや保障がほしい。だから私たちは団体を作り、規則を作ってやっている。ただそれだけのことです。」

できることをやっているのだから苦労は無い、というのが馬場さんの考えです。この考え方のためでしょうか、やがて馬場さんたちの始めた送迎活動は周囲の透析患者の間に馴染み、一人また一人と運転ボランティアをかってでる患者が現れるようになりました。

次回は…

運転ボランティアの気持ち ④